

お金には魔力があるという。お金は人を狂わせる。しかし一方で、お金のことは汚いことであって、あまり口に出す話題ではないとされる。タブーなのだ。これがもうひとつの魔力を生む。

お金には別称が多い。ちょっと思いつくだけでも「おあし」、「おげぜ」、「ぜに」、「お鳥目」。払うときの「お勘定」、「お愛想」、「お代」、「清算」など、日本人は、なんとかして「お金」ということばを使わないように、使わないようにしていると思えない。更に、「代」、「費」、「金」、「料」、「賃」などの接尾辞がある。

たとえば大学を受験して、無事入学するまでには、受験「料」と入学「金」と施設「費」と寄付「金」と授業「料」を払うことが普通である。地方から上京するのであれば、これに電車「代」や家「賃」も必要になる。受験や授業は「料」、入学や寄付は「金」、施設は「費」、電車は「代」、家は「賃」。これらはどのように使い分けられているのか。いちいち言い分けるのは面倒である。一緒にしたらいいではないか。特に、日本語を外国人に教えていると、大問題になる。

費は一般に、食費、光熱費など、家計の支出としてかかるお金のことであるが、まとめられたもの。用途を一括して、そのトータル



絵・森 英二郎

お金の魔力

金田一秀穂

としてかかるお金のことを言う。

これに対して、代というのは、食事代、電気代など、一回ごとに必要なお金であり、用途が具体的で、個別的に示される。

料は、通行料とか入場料など、はっきりと決められた金額がある。支払うことよりも、金額が問題である。また、対応するものは商品ではなく、サービスである。

賃は、電車賃、お駄賃など、前もって払う額が予測されており、渡すべき相当の金額のことに使われる。タクシー代と言って、タクシー賃と言わないのは、賃がどちらかというと古い言い方だからだろう。

金は、金額が漠然としていてはつきりしない。謝金、礼金、褒賞金など、あってもなくてもいいようなものに使う。賠償金も、言われなければ払わなくていいとされているのかもしれない。

このようにして、用途が限定されているのか包括的なのか、また金額に相場があるのかあつてないようなものなのか、手に入れるものが有形か無形か、というようなことを考えて、お金について表すべきことばが決まっている。

こんな複雑極まりないことを日本語にさせるのは、お金の魔力があるからにちがいない。



きんだいち・ひでほ 1953年東京生まれ。東京外国語大学大学院修了後、世界各地で日本語の指導に当たる。現在杏林大学外国語学部教授。著書「新しい日本語の予習法」角川書店など。